漢方薬の材料 ウラルカンゾウ

ブランド化へ栽培推進

おやべてまひま協議会 甘味料でも期待

小矢部市の有志でつくる「おやべてまひま協議会」は漢方薬の材料の一つであるウラルカンゾウの栽培を進めている。本格的な栽培を視野に入れた取り組みは県内初とみられ、協議会では新年度、甘味料としての可能性も探り、小矢部ブランドとして普及を目指す。

おやべてまひま協議会が栽培を始めたウラルカンゾウ

協議会は、地域の有機資源を活用した土づくりを基本に、農村地域の活性化を目標に掲げて2014年に結成された。ウラルカンゾウの栽培は同年に試験的に実施し、良好な結果が得られたことから、15年度に国の「農村共生・交流総合対策交付金」の交付を受け、本格的に着手した。

栽培している畑は市内の3カ所にあり、協議会が家庭ごみや産業廃棄物などの有機資源で生産した土を使って昨年10月に作付けした。春以降、芽を出すとみられるが、漢方薬や甘味料の材料になる程度に成長するには3年間ほどかかるとされる。

ウラルカンゾウは国内で販売されている漢方薬の約7割に使われ、鎮痛や解毒、せき止めなどに効果があるとされる。ほぼ全量を輸入に頼っているが、主要な輸入先の中国が輸出規制を実施しているため、価格が上昇している。

協議会では、交付金支給の最終年となる新年度、甘味料としての使い方などのレシピを作製し、漢方薬の材料としてだけでなく、食材としての使用法もまとめ、普及の条件を整える。

おやべてまひま協議会の中山壽さんは「手間暇をかけて本物を目指し、小矢部のブランドに育てたい」と話している。